

史跡 日高遺跡

遺構分布確認試掘調査概要 1

平成 6 年

高崎市教育委員会

序

昭和51年、関越自動車道建設に伴う事前の発掘調査の際、日高遺跡で谷地に開田された弥生時代後半の水田跡が発見されました。その後の調査で、この日高遺跡が静岡県登呂遺跡よりさらなる稲作文化の東進と、墓地、耕地、住居跡群からなる集落景観を明らかにする貴重な遺跡として全国的に脚光を浴びました。

あれから19年の歳月が経過しましたが、その間、史跡整備に向けていろいろな努力や条件づくりが続けられてきました。平成元年11月9日には史跡の指定を受けたのを契機に、文化庁による土地先行取得事業の該当事業として、さらに、地元の皆さんの強い要望を受けて公共用地取得事業特別会計を組み、公有地化事業が着実に進捗しております。いよいよ史跡整備に着手する機が熟してきたといえます。史跡整備には、その根拠となる発掘調査の実施、整備構想の策定などいくつかの段階を経なければなりません。まず、土地に埋もれている遺構のようすを正しく把握することからはじめるべきものと考えております。

ここに第一次試掘調査の成果を紹介し、今後の事業を進める一助として本書を刊行いたしました。関係者をはじめ、多くの方々に広くご活用いただければ幸いです。

平成6年3月30日

高崎市教育委員会教育長 網 中 正 昭

例 言

1. 本書は群馬県高崎市日高町字高矩前31-4外に所在する史跡日高遺跡の試掘調査報告書である。
2. 調査は高崎市教育委員会が実施し、久保泰博、村井田雅明が担当した。
3. 試掘調査の期間は平成5年8月4日から平成5年11月10日である。
4. 本書の執筆は、「はじめに」は鬼形秀夫と石川正之助、「調査の概要」を久保、村井田が担当し、「おわりに」は関係者の討議を経て久保が担当した。
5. 第1図は、高崎市役所発行の「高崎No.1」10,000分の1地形図を縮小した。第2図は国際興業側に委託、作成した日高遺跡とその周辺の1,000分の1地形図を基にした。
6. 第2図の基準点は、国上座第IX系内の座標である。
7. 本調査の遺跡番号は233である。

目 次

序

例言

1.はじめに	2
日高遺跡調査・保存の経緯	2
立地と環境	3
2.試掘調査の概要	5
3.おわりに	9
図版	10

挿図目次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 標準土層概念図	5
第3図 トレンチ配置図	7

1 はじめに

日高遺跡調査・保存の経緯 昭和51年、高崎市内において関越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施され、日高町地内で弥生時代の水田跡が発見されて、稲作文化のさるる東進を示す新たな発見として全国的に脚光を浴びた。発見と調査、保存の経過は、次のとおりである。

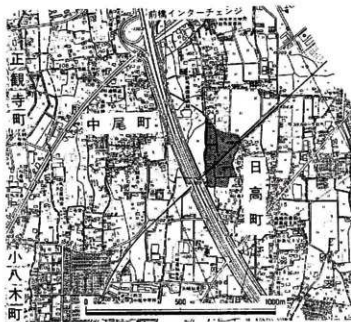
昭和50年5月、県教育委員会は日高町地内で予備調査を実施し、地表下約1.5mのところで弥生時代水田跡を確認する。

昭和51年1月、本格的調査が始まり、JR上越線北側に於いて弥生時代水田跡、木製品、土器、方形周溝墓、平安時代水田跡を検出。昭和53年1月、文化庁長官が視察し、重要遺跡との評価を受ける。のち遺構保存のため、工事が盛土工法から高架式工法に変更される。

昭和54年2月、市教育委員会が遺跡範囲確認調査を実施する。その結果、JR上越線をまたいで高道東側、現在の日高集落西側に囲まれた約6ヘクタールの地区に水田跡、住居跡群が検出される。これにより日高遺跡は集落・耕地・墓地からなる弥生時代の集落構造を示す遺跡であることが明確になった。

平成元年11月9日、史跡に指定される。指定地は46,721.43㎡である。平成4年10月26日、未指定地のうち11,109.9㎡を市史跡に指定する。平成5年3月2日、未指定地のうち、5,242㎡を市史跡に追加指定する。

一方、史跡整備に向けて史跡地公有化事業も平成3年度から着手している。日高遺跡の整備は「高崎市第3次総合計画」にも位置づけられ、早期史跡整備を望む声も大きい。こうした状況のなかで、今年度史跡整備にむけて史跡地内の遺構分布確認調査を実施したが、以下はその調査概要である。



第1図 遺跡の位置

立地と環境 日高遺跡は、市の北東部にある。旧市街地中心部の北々東約5km、JR井野駅からは北東1.5kmにあたり、上越線が遺跡地南半を南西から北東にむけて通過している。遺跡地は、これをはさんで、ほぼ南北に走る幅100m前後の浅い谷と、その兩岸の比高1.5m前後の微高地に立地しており、谷地からは水田や用水、微高地からは住居や方形周溝墓、中世居館など弥生時代後期以来各時期の遺構が検出されている。標高は103m前後である。周囲の景観は近年宅地化が進んできているが、水田が広く開け、微高地は桑園や産栗の畑地として利用され、一部にコナラを主とした雑木林が残されている。

この遺跡のある市域の北部は、榛名山の東南の裾野がいわゆる前橋台地の平坦地に移り変わる地域である。周知のように、この前橋台地の形成は、洪積世末期約二万年前に、浅間山北麓でおこった山体崩壊による土石流が、榛名山北側の谷を廻り赤城山の裾との間の谷を通過して流れ出し、すでに形成されていた古い扇状地を厚さ十数mに瞬時におおったもの（前橋泥城）が原面をなしている。その上を水成堆積の上部ロームが厚さ3m前後におおっているが、この中に浅間山噴出の板鼻黄色軽石層をはさんでかなり普遍的に堆積している前橋泥炭層から知られる約一万三千年前の環境は、いたるところに沼沢のある湿滞地の拉がりと寒冷なウルム氷期の気象である。一方、榛名山東南麓の裾野は、約一万四千年前に、その東の峰の山体崩壊による岩層なだれが泥石流となって押し出した相馬ヶ原扇状地（火山扇状地）によって形成されており、こうした、すでに人間の生活が営まれている比較的新しい時期に、自然環境を大きく変え、現在の地形のベースを形づくった二つの成因の異なる災害層が重なり合うのがこの地域である。しかも、この相接する二つの地域、ことに前橋台地は、市域において東西約8km、南北約9kmの拉がりをもって、全市域の約四分の三の地域を占めている。

その後、榛名山を水源とする中小の河川が、台地面を網状に流路を変えつつ浸食と堆積をくりかえし、谷地や自然堤防の形成や環境をくりかえす。前橋泥炭層中の板鼻黄色軽石層の上位ですでに気候の温暖化の傾向が認められるが、この軽石層降下の影響もあって火山灰地帯の荒原の林相を呈していた様である。沖積世にはいって、温暖化の傾向は進むが、この日高遺跡谷地の、4世紀中葉浅間山噴出と推定されている浅間山C軽石におおわれた弥生時代後期の水田土壌では、後背地にコナラを主とした落葉広葉樹林の繁茂が知られ、現在に近い気象条件の安定が推定されているが、水田は、生産性の低い排水不良の溜田状態で、イネの花粉の量も少なく、周囲に池沼の存在も推定されており、この遺跡でイネの花粉がいちじるしく増加するのは、6世紀初頭の榛名山二ツ岳噴出の二ツ岳火山灰の堆積以後とされている。

さらに、この地域の環境を考える際にいまま一つ過酷な条件がある。いまでも年代の指標として用いてきた様に、沖積世に入ってから浅間山、榛名山二ツ岳の火山活動は続き、さきにあげた4世紀中葉の浅間山C軽石の降下、6世紀初頭の二ツ岳火山灰、同じく中葉の二ツ岳軽

石、平安時代108年の浅間山B軽石、そして天明三年(1781)年の浅間麓の浅間山A軽石と少なくとも5回の火山災害がつぎつぎに襲い、それぞれに十数cmから数十cmの降灰や軽石の堆積、軽石流や泥流の押し出しも認められて、これに埋もれて潰滅した耕地が検出されている。これらにともなう高層気流のつた微粒物質のひきおこす異常気象も考慮しなければならない。

この地域において、人間の生活を通る軌跡の初出は、現状ではその北西部、相馬ヶ原扇状地に接する大八木町出土の槍先形の矢頭器1点のみで、詳細は明らかでない。縄文時代については、前期後半から中期前半の資料も認められ前期末の竪穴住居も検出されているが、烏川の崖端近くや、台地のほぼ中央を北西から南東に刻んで河岸段丘も形成している井野川に面した台地縁辺や段丘面、相馬ヶ原扇状地崖端の低台地など比較的高峻な場所に偏する傾向もあり、事例も少ない。その分布が顕著になるのは中期後半からで、従来からの立地の延長にかなりの密度で検出され、石圍やともなう竪穴住居や、柄鏡形に造り出しを備えた敷石住居など1遺跡に複数のものを伴って調査されているが、現状では継続的に大集落を構成した傾向はつかめていない。弥生時代については、前期後半や中期前半、中葉にさかばる資料もわずかに出土しているようであるが、台地中央部の微高地に進出して集落を営むのはその後で、環濠というにはあまりにも浅くせまい溝をめぐらし、給排水に関係したとみられる溝や方形環溝墓、土坑墓などを伴うものもある。しかし、普遍化するものは、この日高遺跡もその中にくまれる後期である。やがて、浅間山C軽石の降下と相前後して、畿内・東海系の石田川期の集落が進出して、4世紀後半から末にかけて、井野川流域や烏川に前方後方墳や大型の前方後円墳が築造される様になるが、この時期に掘られた溝も検出されており、後背低湿地の排水による耕地の改良も予測され、土地生産力の増大を背景に営まれたものとも推測できる。台地上において、集落がいちじるしく増大するのは、5世紀後半から6世紀にかけての鬼高期である。この傾向は、日高遺跡の二ツ岳火山灰降下以後の土壌の花粉分析の結果とも、東国の一般的な傾向とも符合している。その後、中央政府の政治的な要請のもとで、この台地上に東山道が敷かれ、国衙や国分寺が設置されて、上野国の中枢地域が形づくられ、12世紀初頭噴出の浅間山B軽石に埋もれて条里遺制と推測される水田遺構が、ほとんど全城から検出されているが、当然そこには政治的な強制力を前提としているにしても、背景であった洪積世末期以来の環境条件の変遷に適応して進められた生活空間を拡充する努力の成果が認められると同時に、その限界をみることもできる。ちなみに、11世紀中葉以降の史料に、上野国を「亡弊国」と規定しているものが散見するが、その開発の性格の一面を物語るものであろうか、それはまた、度重なる災害とあくなき復興の反復の歴史でもあった。

2 試掘調査の概要

試掘調査は調査対象地内に設けた計25本のトレンチで行った。トレンチは幅2m、長さは諸条件に応じて個別に設定した。また、各トレンチ内に2×1mの断割トレンチを設け、基盤層まで掘り下げ、土層観察を行った。トレンチの掘削は、今後の本調査に支障をきたさないよう、確認可能な最上面の遺構確認面又は遺物包含層で掘削を止めたため、遺構の存在は認められるものの現段階では遺構の性格を確定しないものが多い。以下、トレンチ調査の概略を記す。

■1トレンチ/土層の特徴は、黄茶褐色ローム下に灰茶褐色の砂状のシルト層があり、砂粒、角閃石等が層をなし、水性堆積の様相が見られる。遺構は、南北走向の溝、土坑等を検出。遺物は全98点が出土。内訳は弥生片13、土師器片63、須恵器片9、灰釉陶器片6、軟質陶器片1などの土器片、その他5点である。

■2トレンチ/黄茶褐色細粒のシルト下に微細粒、細粒の砂、小礫が互層をなしている。遺構は溝4、土坑(或いは住居か)1。遺物は全34点が出土。内訳は土師器片29、須恵器片4、灰釉陶器片1。

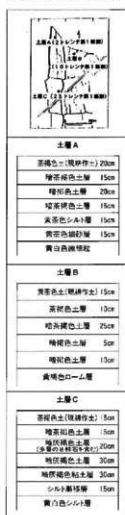
■3トレンチ/遺構は、現地表下約40~50cmの茶褐色土を掘り込む溝1、土坑1を確認。遺物は全95点が出土。内訳は弥生片5、土師器片69、須恵器片14、灰釉陶器片7。

■4トレンチ/遺構は、現地表下約40~50cmの暗褐色土を掘り込む溝1、土坑2、その他にも黒色土の範囲が確認できるが性格はわからない。遺物は全46点が出土。内訳は弥生片1、土師器片26、須恵器片14、灰釉陶器片2、陶器片1、磁器片1、その他1。

■5トレンチ/溝、土坑、敵等を確認。トレンチ中央付近に現地形で約50cm前後の、北が高く南が低い段差部があり、この下層部に幅約11mの堀を検出。遺物は全283点が出土。内訳は弥生片55、土師器片208、須恵器片11、磁器片1、瓦片1、赤チャート剥片1、その他6。

■6トレンチ/遺構は不明なものが多く、本格的な遺構確認はなお下層にて行うべきかと考えられるが、遺物片が出土し始めたので掘削を止めた。遺物は全39点が出土。内訳は弥生片10、土師器片27、灰釉陶器片1、その他1。

■7トレンチ/前記6トレンチと同様な理由で掘削を止めた。なお、トレンチ内の一部を断割ったところ、掘り込みと数個体の變等の遺物を検出。或いは奈良・平安期の住居址であるかも知れない。遺物は全



第2図 標準土層概念図

30点が出土。弥生片3、土師器片26（ほぼ完形品も1点として勘定した）、灰釉陶器片1。

■8トレンチ／トレンチ北側に堀跡らしき土色を検出。この部分は前記5トレンチで触れた段差下の畑面が東西の帯状にさらに数センチ程低く、5トレンチ中央付近で検出した堀の東延部と考えられる。遺物は全36点が出土。弥生片13、土師器片21、窪み石1、その他1。

■9トレンチ／現地地表下約40cmと、比較的高い位置に乾性のローム漸移層がある。遺構は、畝、土坑、柱穴状の跡が密集するが、もう少し下層に、弥生を含む遺構の存在する可能性がある。遺物は全201点が出土。内訳は弥生片64、土師器片132、埴輪片1、陶器片3、その他1。

■10トレンチ／前記9トレンチと連続する地形上に本トレンチは並ぶ。検出遺構及び弥生時代の遺構存在の可能性も9トレンチと同様である。遺物は全163点が出土。内訳は弥生片40、土師器片109、須恵器片7、陶器片1、瓦片5、石鏃1。

■11トレンチ／現地地表下20cm前後の現表土直下にローム漸移層がある。確認した溝、畝等の遺構は近世以降と思われるが、トレンチ近くに弥生時代の遺構がありそうである。遺物は全40点が出土。内訳は弥生片13、土師片25、須恵器片1、陶器片1。

■12トレンチ／土器片が比較的高密度で出始める現地地表下約80cmの暗茶褐色土で掘削を止めたため確認遺構は不明なものが多いが、トレンチ南側では前記した5、8トレンチで検出した堀の東延部が確認できる。遺物は全144点が出土。内訳は弥生片29、土師器片99、ミニチュア土器片（弥生か）1、須恵器片6、埴輪片1、灰釉陶器片2、陶器片1、瓦片2、石鏃1、黒曜石剥片1、その他1。

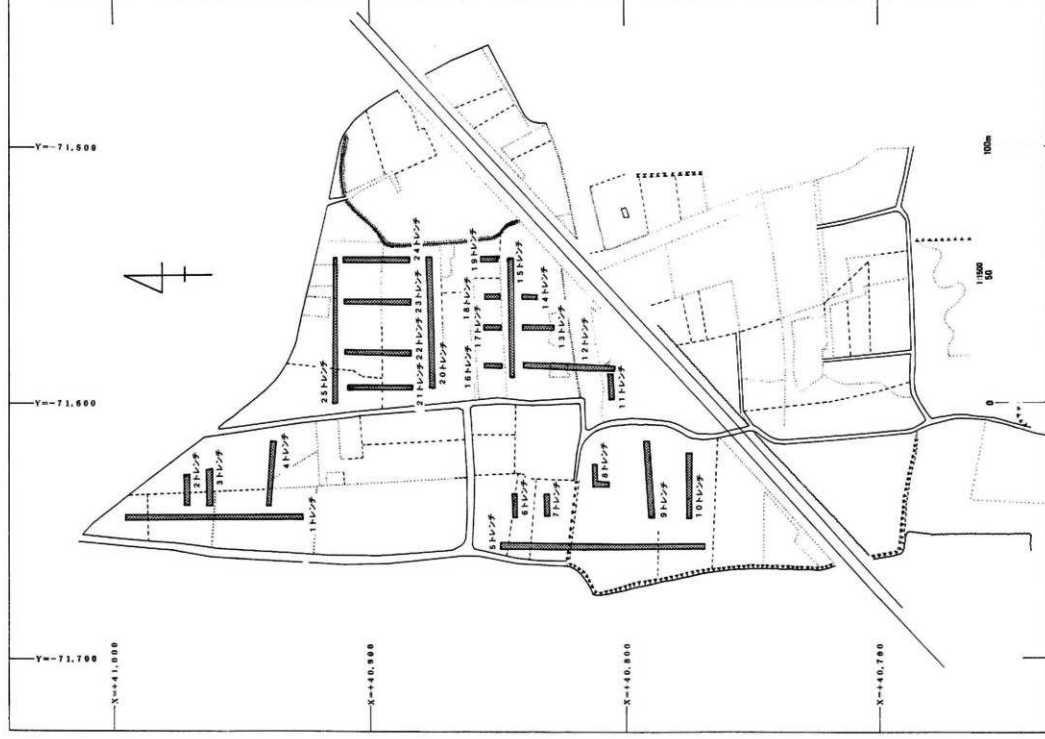
■13トレンチ／現地地表下第3層にB軽石を含む暗褐色土、第4層に少量のC軽石を含む黒褐色土層がある。遺構は土坑2、方形の掘り込み（住居か）1。遺物は全28点が出土。内訳は弥生片5、土師器片13、須恵器片6、灰釉陶器片3、その他1である。

■14トレンチ／土層の様子は前記13トレンチと共通点が多い。検出遺構は土坑2他。遺物は全27点が出土。内訳は弥生片1、土師器片9、須恵器片14、灰釉陶器片1、その他2。

■15トレンチ／現地地表下第3層に二次堆積のB軽石を多量に含む層がある。基盤層はロームとシルトが近接して見られる。遺構は溝4の他、土坑等の他不明なものも多い。さらに下層で明確になろう。トレンチ東寄りでは5～10cm大の偏平な丸礫が集中する部分が2箇所ほど見られる。遺物は全149点が出土。内訳は弥生片14、土師器片71、須恵器片50、灰釉陶器片5、かわらけ片1、陶器片1、瓦片3、その他2。

■16トレンチ／基盤層は鏝状の粒子を含むシルトがかかったロームで、若干低地がかった特徴が見える。遺物は全21点が出土。内訳は弥生片2、土師器片18、黒曜石剥片1。

■17トレンチ／現地地表下約1mにC軽石及び炭化物を含む暗灰色土層がある。本トレンチは何らかの遺構に的中したかと思われるが遺構の性格は不明。基盤層はシルトがかかったロームであ



る。遺物は全20点が出土。内訳は弥生片2、土師器片6、須恵器片8、灰釉陶器片1、軟質陶器片1、陶器片1、その他1。

■18トレンチ／基盤層の黄茶色のローム上にカナイワ状の粒子を含む細粒の灰色土、その上層にC軽石粒と若干の焼土粒を含む暗褐色土及び灰茶褐色土がある。遺物は全27点が出土。内訳は弥生片1、土師器片8、須恵器片18。

■19トレンチ／確認遺構は溝状1、土坑状1。基盤層はシルトがかっている。遺物は全5点が出土。内訳は土師器片4、須恵器片1。

■20トレンチ／遺物は全23点が出土。内訳は弥生片2、土師器片14、須恵器片5、灰釉陶器片1、その他1。

■21トレンチ／遺物は土師器片6、須恵器片1の計7点が出土。

■22トレンチ／遺物は全9点が出土。土師器片5、須恵器片1、灰釉陶器片2、陶器片1。

■23トレンチ／遺物は全8点が出土。内訳は土師器片6、須恵器片1、軟質陶器片1。

■24トレンチ／遺物は全15点が出土。内訳は弥生片3、土師器片9、須恵器片2、埴輪片1。

■25トレンチ／遺物は全33点が出土。内訳は土師器片27、須恵器片2、灰釉陶器片1、陶器片1、瓦片1、その他1。

なお、遺物は上記トレンチの他、表採の磁器片3、黒曜石石鏃1、素焼土製の基石7がある。

3 おわりに

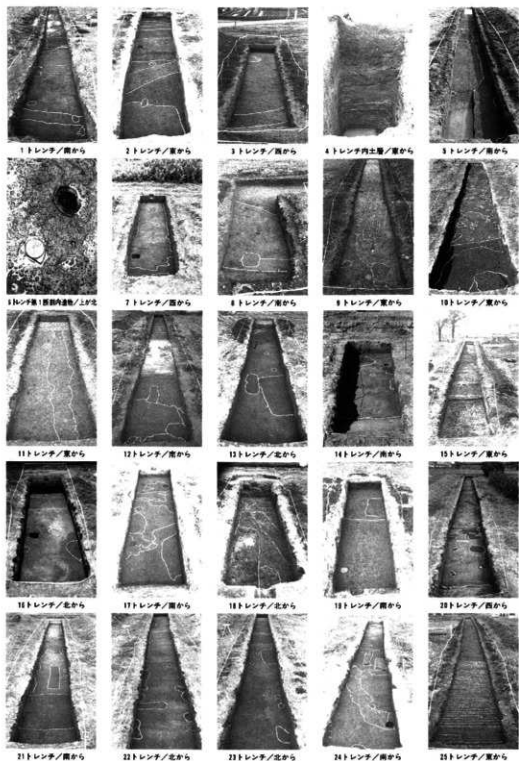
今回の発掘調査の対象は、日高遺跡のうち上越線北側の台地上である。ここでの標準的な堆積は、シルト質土層をベースに、黒褐色粘質土層、暗褐色粘質土層、栗色粘質土層、B軽石混じりの褐色土層と重なり、場所によってFA層やB軽石層、C軽石層が介在している。このうち弥生時代遺構の確認面は黒褐色粘質土層の表面で、比較的深く、しかもその上層に奈良・平安時代の遺構が検出されるところも多く、重機による表土掘削は、その破壊をさせて上位の確認面で止めざるを得ず、弥生時代遺構の確認面まではほとんど到達できない状況であった。

調査による出土遺物や表面採集された遺物には、黒曜石製有柄の石鏃、土師器や須恵器、灰釉陶器、軟質陶器、磁器、埴輪、布目瓦等の破片があり、第5・6・8・12トレンチからは中世居館を囲む堀跡も検出され、各時代にわたる遺構の累積と密集が予測できる。

今回の調査で、弥生土器片の出土頻度の集中するのは、第5・9・10・12トレンチである。住居の分布は予想よりも南に偏り、この地区が集落の北限ではないかと推測される。

各トレンチにおいてその隅にビットを設け、地層の堆積状態を把握したが、弥生時代の原地形や集落復元の際に鍵層となるであろう浅間山C軽石層の堆積を確認できる地点も多く、当時の集落周辺の微地形や環境の利用状況を推定できる基礎的な条件がかなり整ってきた。

図版



フリガナ	シセキ ヒダカイセキ
書 名	史跡 日高遺跡
副 書 名	遺構分布確認試験調査概要 1
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第133集
編 著 者 名	石川正之助、鬼形芳夫、久保素博、村井田雅明
編 集 機 関	高崎市教育委員会
所 在 地	〒370 群馬県高崎市高松町1番地
発 行 年 月	西暦1994年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
日高遺跡	群馬県高崎市 白高町字高畑 前31-4外			36°21'55"	139°24'	1993.08.04 1993.11.10	1485.5m ²	史跡整備

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日高遺跡	集 落	弥生時代		弥生土器片／ 土師器片／須 恵器片／軟質 陶器片／布目瓦 片／石炭	史跡整備に伴う 遺構分布確認 試験調査
	集落か	古墳時代	溝・土坑等		
	集落か	奈良時代	溝・土坑等		弥生土器片の 出土頻度の集 中する第5・ 9・10・12ト レンチ付近が 集落の北限か
	集落か	平安時代	B軒石下遺構		
	居 館	中 世	堀		
		近 世	溝		

高崎市文化財調査報告書第133集

史跡 日高遺跡

遺構分布確認調査概要 1

平成6年3月 印刷

平成6年3月 発行

編集 高崎市教育委員会

発行 高崎市教育委員会

印刷 進日電印刷株式会社

